岡山大学大学院文化科学研究科　『文化共生学研究』第１号（2003.３）

日本列島の先史時代における異文化接触と文化の生成
― 学際的共同研究に向けて ―

松本　直子

はじめに

文化共生学の実践的研究の一環として、日本列島の先史時代における異文化接触と文化の生成をテーマとした考古学・人類学・社会学・社会心理学による共同研究を計画している。このプロジェクトは緒についたばかりであり、具体的な成果を出すにはまだ時間がかかると思われるが、本稿では、この研究テーマの概要と意義、とくに学際的な共同研究が必要である理由について述べ、今後の研究の方向性を示すことにしたい。

考古学の視点

文化共生学の中の重要な要素である異文化接触や新しい文化の生成は、必然的に時間軸を含む問題である。これらの現象に関して、もちろん現代社会は豊かな研究対象となるが、異文化接触がどのようなプロセスで進行するのか、新しい文化はどのようにして形成されていくのか、ということを確かめるためには、ある程度の時間幅をもって検討することが必要となる。

時間幅の取り方には、いろいろなレベルがあるだろう。数日から数年といった短期間であれば、現代社会において直接観察・分析することができる。数十年、数百年のオーダーになると、歴史資料を活用する必要が出てくる。そしてそれを超える年代幅で文化変化についてみていこうとするとき、考古学的方法が必要となる。とくに人類史の大半を占める先史時代については、物質的痕跡を資料とする考古学が研究の中心とならざるをえない。

文化共生、異文化接触、文化の生成という問題について考古学が貢献できる可能性として、非常に長期的視点で問題を捉えられることに加えて、近代国家の影響を受けない集団間関係や文化の動態について検討できることがある。異文化共生について考えるときに主要なカテゴリーとなる民族やエスニシティは、現代社会においては国家と切り離して論じるのが不可能なほど、国家をベースとした政治的関係の中に埋め込まれている。このような政治的関係が存在しない状態においては、異なる文化的背景をもつ集団間にはどのような関係が生じるのか、エスニシティのような集団的アイデンティティが存在するとすれば、それはどのようなかたちをとるのか。また、そのような集団間関係が、どのようにして国家の成立につながるのか、あるいはそれを阻むのか。以上のような問題を考えるうえで、先史時代も研究対象とする考古学はなんらかの手がかりを提

示することができるかもしれない。

日本列島においては、「日本人は単一民族である」というイデオロギーが非常に強い。これまでの日本考古学も、ひとつの民族としての日本人の歴史を提示することによって、このイデオロギーの強化に一役買ってきたところがある。第2次大戦後にはじまった考古学ブームは、皇国史観の崩壊とともにアイデンティティの崩壊を経験した日本人が、新しく自らのアイデンティティを探求しようとする動きのひとつとして位置づけることができる（Fawcett 1996）。過去は常に現在的視点から再解釈され、再創造され、現代社会における伝統や社会問題を正当化したり操作したりするのに利用されてきた。考古学者と現代社会におけるさまざまなコンテクストとの密接な関係については、1980年代以降批判的検討が進められてきた（Hodder 1985; Shanks and Tilley 1987）。その結果、考古学の営みを現代社会の諸問題から完全に切り離すことは不可能であり、むしろ考古学者はそのことを明確に自覚して研究を進めるべきであるという見解がだされており（Leone 1986）、筆者も同意するところである。

このような見地に立ったうえで、文化共生、異文化接触、文化の生成という今日的な問題意識のもとで日本列島の先史時代を再検討することは、次のような点で意義があると考える。ひとつには、日本列島の歴史を「日本人の歴史」からいったん切り離し、東アジアで展開した文化や集団の歴史の中に位置づけることである。これにより、これまでの日本民族国家的な歴史観にとらわれない歴史認識が可能となると考えられる。二つ目は、先に述べたような近代国家成立以前の集団間関係や文化接触の様相を明らかにすることによって、文化の共生や異文化接触という普遍的な問題に対する新たな手がかりを提供することである。しかし、このような目的を達成するためには、考古学だけではなく、社会理論や民族誌、集団間関係に関わる心理的要因などについての学際的研究が必要となる。学際的研究の重要性と具体的な問題設定については後で述べることにして、その前に、共同研究の具体的な研究対象のひとつである縄文時代から弥生時代への転換について、現段階で考古学的に明らかになっている状況を概観しておきたい。

縄文から弥生へ

明治時代に日本で考古学的な調査・研究が始まり、縄文時代の貝塚などが発掘調査されると、それらの遺跡を残した人々は何者か、という議論が起こった。当時は古事記・日本書紀の影響が大きく、日本人学者も欧米人学者も盛んにその記述を引用し、石器時代人は現代日本人の直接の祖先ではなく、先住民であるという主張が主流となった[1]。アメリカやヨーロッパから日本に招聘されたエドワード・モースやハインリッヒ・シーボルトなどの欧米人学者にとっては、移住者による先住民の征服・駆逐というのがきわめて身近で現実的な現象であったことも、彼らの解釈を導いた要因のひとつかもしれない。

大正時代になると、弥生時代の文化的様相がしだいに明らかとなり、これこそが日本人の祖先

が残したもので、それ以前の先住民の残した遺跡・遺物とは異なるという認識が生まれた。日本列島の周辺地域にも足を伸ばして人類学的・考古学的調査を行っていた鳥居龍蔵は、弥生時代に朝鮮半島を経て渡来した人々を「固有日本人」と呼び、縄文時代から弥生時代への変化を民族交替として捉える見方を確立した。鳥居は、これ以外の文化的多様性も民族の違いを示すものとして解釈し、日本人の構成は単純ではなく、複数の民族による「雑種民族」であると考えたが、「只独り此間に帝室のみは連綿として同一系統を続けて居らるる」とし、その「日鮮同祖論」的発言は、日韓併合と植民地支配という当時の社会情勢を支持するものであった（工藤 1979）。

戦後、民族交替説に替わって主流となったのは、経済的側面に注目した説である。縄文時代が狩猟採集の時代であるのに対して、弥生時代は日本列島で農耕が行われるようになった時代である、という認識は戦前から確立していた。敗戦後、日本考古学はマルクス主義を主たる理論的枠組みとして採用し、「科学的」な歴史の構築をめざした。マルクス主義的な枠組みのもとでは、縄文時代から弥生時代への転換は、獲得経済の縄文文化において経済的矛盾が蓄積し、その矛盾を解消するために縄文人の主体的選択の結果として農耕社会への転換が起こったことによると説明された（近藤 1962；鎌木 1965）。

縄文人主体説が出される一方で、縄文時代と弥生時代人骨の形質人類学的研究の進展により、弥生時代のはじまりには、縄文人とは異なる特徴をもつ大陸からの渡来人がきたことが指摘された（金関 1955、1963）。少なくとも北部九州から山口県沿岸部にかけては、縄文時代に日本列島に居住していた集団とは異なる形質的特徴をもつ人々が移住してきたとしか考えられない証拠がでてきたのである。こうして移住説は戦前の民族交替説とは異なる視点から、改めて注目されるようになった。

縄文から弥生への転換については、縄文人の主体性を重視する説と、渡来人の役割を重視する説が、長年にわたって対峙し、論争が続いてきた（橋口 1985；春成 1990；田中 1986他）。最近は、こうした「主体性論争」の意義に対する疑問が出され、縄文人対渡来人という対立的枠組みにとらわれない議論が求められるようになりつつある（藤尾 1999）。考古学的証拠と形質人類学的証拠を付き合わせると、日本列島在来の集団も、おそらく朝鮮半島から移住してきたと考えられる集団も、ともに弥生文化の形成に関わっていることは明らかである。弥生時代開始期の日本列島においては、さまざまなかたちでの異文化接触と、それを基盤とした新しい文化の生成が起こっていたということができる。そうであれば、これから追及するべき問題は、そこで実際にどのような社会的・文化的現象が起こっていたかということになる。

弥生時代開始期の様相は、きわめて複雑であることが近年の研究の進展で明らかになってきた。長く議論の中心になってきた生業についても、縄文時代における栽培植物の存在が明らかとなり、食糧生産の有無だけで単純に線引きできないということが分かってきた。1979年に、福岡県の板付遺跡で、それまで縄文時代晩期後半とされていた時期の水田遺構が発掘され、土器編年によ

る時代区分と経済的変化とが完全には一致しないことが認識された。また水田稲作の導入と同時に、朝鮮半島南部とよく似た磨製石器類や壷形土器などの物質文化も北部九州に登場することも確認された。一時期は、朝鮮半島系の石器が導入される一方で、土器には伝統的な縄文的要素が残ることから、移住者は男性中心で構成されており、在地の女性と婚姻したというモデルも提示された（金関 1972）。

しかし、調査・研究の進展により、事態はもっと複雑であることが分かってきた。石器においても、木製農具の加工に使われたと考えられる、それまでの縄文文化の伝統にはなかったタイプの石器は朝鮮半島から導入される一方で、打製石鏃などの縄文系打製石器は弥生時代に入ってからも残る（下條 1986）。土器にしても、縄文土器の系譜をひく土器が作られ続ける一方で、丹塗磨研の壷形土器は朝鮮半島から導入される。朝鮮半島系の文化要素と、在来の文化要素は、複雑でありながら、決してランダムではないパターンで組み合わされ、新しい文化を形成していく。

これまでの考古学的研究で明らかとなったパターンについて簡単に概観すると次のようになる。弥生時代早期の日本列島には、朝鮮半島系の文化要素のみを主体とする遺跡はみつかっていないので、移住者がコロニーのような形で集落を形成していたとは考えられない。一方で、縄文文化の系譜を引く土器や石器を使用している集落で、住居・集落の形態や墳墓に現れた埋葬行為が明らかに朝鮮半島に類似したものへと変化している。日常生活の中で製作・使用される道具類は、伝統的な要素を残しながらも朝鮮半島系の要素が混じり、新しい型式の人工物が生み出される[2)]。以上のような状況をみると、日本列島に居住し、縄文文化の伝統を受け継ぐ人々と、朝鮮半島から渡来した人々が、ひとつの集落に住み、ともに人間と文化の再生産に寄与したことは確かである。

通常は容易には変化しないと考えられる儀礼や宗教的信念に関わる部分も、当初から朝鮮半島に類似したものへと変化している。すなわち、まず経済的基盤が変化し、それが社会的・心理的側面の変化をもたらしたとする単純な唯物論的モデルでは説明できない現象が指摘されつつある。余剰の蓄積や水争いなどの経済的理由から発生したと考えられてきた戦争についても、弥生時代の開始期に新しい文化的思想として導入された可能性が考えられている（藤尾 1996；松木 2001）。縄文から弥生への変化は、社会的にも精神的にも大きな転換を伴っていたと考えられるが、それに関わる心の問題はまだ不明な点が多く、今後の研究の進展が期待されている（宇野 1996；松本 2000）。

このような考古学的状況を、異文化接触と文化の生成という視点から検討すると、さまざまな問題点が浮かんでくる。第一に、異なる文化に属する人々が、一方の移住というかたちで接触したにもかかわらず、どうして一見スムーズな共生と新しい文化の生成が可能だったのだろうか。筆者は最近エスニシティの転換というモデルで以上のような現象を解釈したが（松本 2002）、このモデルや問いの立て方の妥当性も含めて、多様な視点からの検討を要する複雑な問題が多く含

まれている。こうした問いに答えるためには、現存する学問の領域を超えた、活発な学際的研究が必要となる。次に、筆者が考える学際的研究のあり方について述べてみたい。

学際的研究の必要性

考古学は、物質的証拠に基づいて長期的な文化変化を捉えることができるが、直接その変化に関与した人々に対面して話を聞くことはできない。この資料的制約のため、考古学は資料の分類と記述、その背後に想定される「考古学的文化」の認定以上のことを望むべきではないとする主張もなされてきた。しかし、その一方で、考古学の目的は過去の社会構造や文化変化を解釈あるいは説明することであるという意見も、繰り返し出されている。

考古学は、これまでさまざまな理論を関連諸分野から導入することで、この問題を解決しようとしてきた。1960年代に北米で誕生したプロセス考古学は、一般システム論とサイバネティクス理論を取り入れて、文化変化を説明しようとした（Binford 1962）。また、考古学的に観察されるパターンと、人間行動の一般理論とをつなぐためのミドルレンジ・セオリーを構築するために、考古学者自らが物質文化と人間行動の関係に焦点を当てた民族調査を行うようになった。考古学者による民族調査は、民族考古学ethnoarchaeologyとして広く認知されるようになった。1980年代にイギリスを中心として発展したポストプロセス考古学は、哲学や社会学・人類学に接近した。哲学ではフーコーの権力論や現象学がとりあげられ、社会学・人類学ではギデンズの構造化理論やブルデューのハビトゥスなどが盛んに引用されるようになった。過去の社会を理解するためには、行為者agentを組み込んだ理論を構築する必要があるという主張が生まれ、名もない人々が日々の生活の中で製作・使用した物質文化が大半を占める考古資料は、むしろ個人的行為者のレベルでの分析に適しているという認識も提示された（Shennan 1993）。

このようなこれまでの動向の問題点を指摘するとすれば、理論の援用が常に一方的になされてきたということがあげられるだろう。考古学者は、自らの資料を説明する上で、あるいは自らの主張を提示する上でふさわしいと考えられる理論や概念、アナロジーを、人類学、社会学、哲学、心理学などの中に見出し、借用してきた。その流れは基本的に一方向的なものであり、その成果がこれらの関連諸分野に還元されるということはほとんどなかったといってよい。同時に、このような理論の持ち込みに対して、言葉や理論を借りてきただけで、実質的な研究の進展につながっていないという考古学内部からの批判も根強くある。

共同研究としては、年代測定や古環境復元などに関わるさまざまな自然科学分析の専門家との関係は密接であり、考古学に関連する複数の分野をまとめて考古科学と称することもある。しかし、このようなまとまりを超えた学際的共同研究は、日本ではまだほとんど行われていない。しかし、人類の社会と文化を対象とする諸分野の研究者が、方法や枠組みの違いを超えて共通した課題に取り組むことは、人文社会科学を発展させる新しいアイデアや基盤を生み出すための、き

わめて有望な道のひとつであると考える。

考古学を含む学際的なプロジェクトや共同研究は、欧米を中心として活発化している。近年多くの著書や論文が出され、一般向けの読み物も含めてひとつのブームともなっている進化心理学は、現代人の心の仕組みを理解するためには、それがどのように進化してきたかを考えなければならない、という認識に立つものであるが、心理学、生物学、社会学、人類学、霊長類学、考古学などの数多くの分野の研究者が参画している。学際的なプロジェクトに基づく本が出版されている他（Steele and Shennan 1996）、同じ大学に所属する心理学者と考古学者の共同研究などが各地で進められている（Noble and Davidson 1996; Wynn and Coolidge 2002）。また、複雑性を生成するメカニズムの解明をめざす学際的研究機関として設立されたサンタフェ研究所でも、行為者に焦点を当てた小規模社会のモデル化というテーマで会議が開かれ、経済学、社会学、コンピュータ科学、人類学、考古学、哲学から研究者が参加している（Kohler and Gumerman 2000）。積極的な学際的研究が議論の活性化と研究の促進につながることは、これらの最近の事例が如実に示している。

研究の方向性

先に述べた、北部九州を中心とした縄文時代から弥生時代への変化については、具体的に次のような問題を学際的検討の俎上にあげることができる。文化，生活様式を異にする集団に属する人々が、一方の移住というかたちで接触したにもかかわらず、どうして一見スムーズな共生と新しい文化の生成が可能だったのか。このような状況において、経済的・心理学的・政治的要因はどのような役割を果たすのか。また、社会構造のようなマクロレベルの現象と、個人の意思決定や価値観のようなミクロレベルの現象は、どのような関係にあるのか。移住にいたるまでの異文化集団間の関係と、それによって形成された双方に対する態度、情報の蓄積によって、移住時の対応はどのように左右されるか。そして、エスニシティや集団的アイデンティティは，物質文化の上にどのように現れるのか。

先に述べたように、現時点での考古学的証拠は、一見スムーズな共生と文化の融合を示している。しかし、これはまだひとつの抽象的仮説に過ぎない。学際的視点から検討するとすれば、大きく二つの方向性があるだろう。ひとつは、考古学者によるこのような物質文化の読み方が適切であるかどうかの検討である。たしかに考古学的には、移住者と在来集団の間にあからさまな対立・緊張関係や戦闘があったことを示す証拠は認められない。しかし、集団間の葛藤や、エスニシティなどの社会的アイデンティティが物質文化にどのようにあらわれるのか、という点に関するミドルレンジ・セオリーが確立していないので、そうした直接的証拠の欠如から一概に対立や緊張関係がなかったといえるかどうかは即断できないのである。

物質文化と人間の行動・認知との関係については、これまで民族考古学的調査によって追及さ

れてきた。その成果として、物質文化のスタイル[3]が社会的情報交換のメディアとして重要な役割を果たしていること、物質文化による情報発信は、意図的な場合とそうでない場合があること、自分個人や自分が属する集団のアイデンティティを折衝する戦略として物質文化のスタイルが用いられることなどが指摘されてきた（Wobst 1977; Wiessner 1983）。アフリカで民族考古学の調査を行ったウィスナーは、社会心理学の理論を引用し、物質文化におけるスタイリスティックな変異は、比較することを通して個人と社会の同定を行うという人間の基本的認知プロセスにその生成の基盤をもつと論じた（Wiessner 1984）。このような物質文化と個人的・社会的アイデンティティとの関係、その異文化接触時の動態については、文化人類学および社会心理学との学際的研究を通してさらに発展させることができると考える。

物質文化とエスニシティの関係については、社会学の構造化理論やハビトゥスという概念を用いたアプローチが行われている（Jones 1997）。物質文化において客観的に観察される類似と差異の総計がエスニシティを単純に反映したものではないということは、考古学においても十分に注意されるようになった。エスニシティはむしろ主観的な帰属意識の問題であるとすると、その主観的意識と客観的に観察可能な文化的特徴の関係をどのように捉えるかが問題となる。日常生活の中で形成される性向の体系であるハビトゥスという概念を介在させることにより、エスニシティの分析は、考古学的解釈にとって手の届かないものではなくなる。歴史的コンテクストの中で形成される性向や志向性に基づく人々の認知および実践は物質文化と深く結びついており、それらとエスニシティの認識および表現の間にもまた密接な関係があると考えられるからである（Jones 1997）。

もちろん、以上のような問題は簡単に解決できるものではない。綿密な理論的吟味に加えて、実際のさまざまな社会状況における物質文化の様相、すなわち特定の集団と特定のスタイルの道具との相関や、その変容の仕方や度合いなどに関する体系的な調査と分析が必要となるからである。また、現代社会における物質文化と人間との関係は、先史時代のそれとは大きく異なっている部分もあることから、現代の社会調査や民族誌を先史時代の様相のアナロジーとして用いることには困難がつきまとうであろう。しかし、この問題が解決しなければ次の問題に移れないということはないだろう。この点にも注意を払いながら次に述べる方向性での研究を進めていくのが生産的なやり方であると考える。

もうひとつの学際的研究の方向は、縄文・弥生変革に伴うより具体的な社会的プロセスを追及することである。弥生時代の開始期にみられるような、先住集団と移住集団の積極的な融合による新文化の生成は、日本列島以外の地域でも確認されている。その中でも、ヨーロッパにおける農耕文化の拡散に関しては、在地の狩猟採集民が農耕文化を採用したことによって独自の新石器文化を形成したことがいくつかの地域で指摘されている。しかし、そうした文化の転換や、移住集団と在来集団の接触の際に、具体的にどのような社会的・文化的状況が生じたのかについては、

まだ満足できるような理論が提示されていない。考古学的資料に恵まれた日本列島を研究対象として学際的な研究を進めることにより、この人類史的に重要な課題に関して国際的議論に大きく貢献できる可能性をもっている。

残された物質的証拠から、生き生きとした実際の社会関係や人々の行動、認知を復元することは、決して容易いことではない。人類学的調査によって蓄積されてきた民族誌や分析は、考古学者が過去の社会について考えるときに，しばしばアナロジーとして利用されてきた。しかし，本研究が意図しているような特定の社会的状況に焦点をあてた民族誌の調査は，まだ十分になされているとはいえない（Shulting n.d.)。いくつかの管見に触れた事例だけをみても、狩猟採集民と農耕民の間には多様な関係がみられ、お互いの集団に対する認識や、農耕に対する意識、魅力と反感の間の葛藤など、さまざまな社会的・文化的・認知的な要因が関与していることが分かる。日本列島の先史時代の人々は、どのようにその時代を生きたのか、過去の社会における個人的経験のレベルに焦点を当てて分析と検討を進めていくことが必要であろう。

個人的レベルといえば、異文化接触という状況において、どのようなストレスや葛藤が生じるか、どのような条件のもとで人は考え方や生活様式を変える気になるのか、という心理学的問題も重要である。心理学的レベルにおいても、現代人に普遍的に備わっていると考えられる能力や傾向と、文化、すなわち後天的に学習される内容によって多様性を示す部分があることが分かっている。その境界は複雑に入り組んでおり、単純に分割することはできないが、先史時代の社会心理学を考えるためにはこの点に注意する必要がある。それをふまえたうえで、社会心理学的視点から、このような状況でどのようなパターンが生じうるかについていくつかの仮説を提示してもらい、その妥当性を資料にもとづいて検討していくというのが、ひとつの方法であろう[4]。

おわりに

ここでは、日本列島における先史時代の異文化接触と新しい文化の生成をテーマとした学際的研究の可能性と方向性について、筆者の個人的視点からの展望を示した。最後に付け加えたいのは、これが単に過去の一事象の研究に終わることのないようにしたいということである。このテーマ自体は時代的・地域的に限定されたものであるが、そこには多くの普遍性をもつ問題が含まれている。この事例研究をひとつの足がかりとして、より広い範囲に研究が展開することを、切に希望している。

普遍的な問題のひとつとして、「共生」という概念の吟味をあげることができるだろう。どのような状態をもって、「共生」しているといえるのだろうか。考古学が対象とする、数十年、数百年、ときに数千年という時間的枠組みでみるとき、「文化」として設定される単位は決して安定した不変の単位ではない。文化はたしかに多様であるが、それらは絶え間なく交流し、変化し、融合し、消えて行く。そのダイナミックな動きの中に、どのように「共生」を見出していけばよ

いのだろうか。果たして文化を単位として共生を論じることは可能なのか、それとも個人レベルで論じられるべきものなのか。個人を単位とするとき、文化や伝統はどのような位置づけを与えられるのか。この概念的問題は、これまで数回行った共同研究のディスカッションにおいても議論の的となってきた。これから共同研究を進める中で、なんらかの答えが見つかることを期待している。

注

1）貝塚などを残したのはアイヌ民族であるという説と、アイヌよりも先に居住していた先住民族（コロボックル）であるという説がしばらく対峙したが、コロボックル説を唱えていた坪井正五郎の死によりアイヌ説が定説となった。なお、石器時代人アイヌ説を最初に提唱したのは、ハインリッヒ・シーボルトの父であり、江戸時代に来日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトである（工藤 1979）。

2）積極的な文化の融合によるイノベーションの例としては、壷棺の成立がある（松本 1997）。

3）同等の機能を果たす道具であっても、形や文様などにおいて多様性が見られるのが人類の物質文化の特徴である。特定の文化的環境で製作法や適切な形についての精神的範型が伝達・学習されることによって生み出される特徴的変異をスタイルと呼ぶ。

4）田中共子氏、村本由紀子氏とのディスカッションに基づく。

参考文献

宇野隆夫 1996 「書評：金関恕＋大阪府立弥生文化博物館編『弥生文化の成立 ― 大変革の主体は「縄紋人」だった ―』」『考古学研究』43-1　104-109頁

金関丈夫 1955 「弥生人種の問題」『日本考古学講座４　弥生文化』河出書房

金関丈夫 1963 「日本人の形質と文化の複合性」『日本語の歴史１　民族のことばの誕生』平凡社

金関丈夫 1972 「日本人種論」『考古学講座10』雄山閣

鎌木義昌 1965 「縄文文化の概観」『日本の考古学Ⅱ（縄文時代）』河出書房新社　東京

工藤雅樹 1979 『研究史　日本人種論』吉川弘文館　東京

近藤義郎 1962 「弥生文化論」『岩波講座日本歴史１』岩波書店

下條信行 1986 「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要』第31号　103-140頁

田中良之 1986 「縄文土器と弥生土器　１西日本」『弥生文化の研究』３　雄山閣　115-125頁

橋口達也 1985 「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会　5-103頁

春成秀爾 1990 『弥生時代のはじまり』東京大学出版会

藤尾慎一郎 1996 「倭国乱に先立つ戦い」『倭国乱る』朝日新聞社

藤尾慎一郎 1999 「福岡平野における弥生文化の成立過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第77集　51-84頁

松木武彦 2001 『人はなぜ戦うのか ― 考古学からみた戦争 ―』講談社

松本直子 1997 「認知考古学の理論的基盤」『HOMINIDS』第１巻　3-19頁

松本直子 2000 『認知考古学の理論と実践的研究』九州大学出版会

松本直子 2002 「縄文・弥生変革とエスニシティ」『考古学研究』第48巻第2号 24-41頁

Binford, Lewis R 1962. Archaeology as anthropology. *American Antiquity* 28: 217-225.

Fawcett, Clare. 1996. Archaeology and Japanese identity. In Multicultural Japan: Palaeolithic to Postmodern, edited by Donald Denon, Mark Hudson, Gavan McCormack and Tessa Morris, pp.60-77. Cambridge University Press, Cambridge.

Hodder, Ian. 1985. Postprocessual archaeology. In Advances in Archaeological Method and Theory, edited by Michael B. Schiffer, 8: 1-26. Academic Press, Orland, Florida.

Jones, Sian, 1997. *The Archaeology of Ethnicity: Constructing Identities in the Past and Present.* Routledge, London and New York.

Kohler, Timothy A. and George J. Gumerman 2000. Dynamics in Human and Primate Societies: Agent-based Modeling of Social and Spatial Processes. Oxford University Press, New York.

Leone, Mark P. 1986. Symbolic, structural, and critical archaeology. In American Archaeology: Past and Future, edited by D. J. Meltzer, D. D. Fowler and J. A. Sabloff, pp.415-33. Smithsonian Institution Press, Washington.

Noble, William, and Iain Davidson 1996. Human Evolution, Language and Mind: A Psychological and Archaeological Inquiry. Cambridge University Press, Cambridge.

Shanks, Michael, and Christopher Tilley 1987. Reconstructing Archaeology: Theory and Practice. Cambridge University Press, Cambridge.

Shennan, Stephen 1993. After social evolution: a new archaeological agenda? In *Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?*, edited by N. Yoffee and A. Sherratt, pp.53-9. Cambridge University Press, Cambridge.

Shulting, R. J. n.d. Slighting the Sea: the Mesolithic — Neolithic Transition in Northwest Europe. Unpublished Ph.D. Dissertation. University of Reading.

Steel, James, and Stephen Shennan (eds.) 1996. The Archaeology of Human Ancestry: Power, Sex and Tradition. Routledge, London and New York.

Wiessner, Polly 1983. Style and social information in Kalahari San projectile points. *American Antiquity* 49 (2) : 253-76.

Wiessner, Polly 1984. Reconstructing the behavioral basis for style: a case study among the Kalahari San. *Journal of Anthropological Archaeology* 3: 190-234.

Wobst, Martin 1977. Stylistic behavior and information exchange. *in For the Director: Research Essays in Honor of James B. Griffin (Museum of Anthropology Anthropological Paper* 61), edited by C. E. Cleland, pp.317-42. University of Michigan, Ann Arbor.

Wynn, Tom, and Fred Coolidge 2002. Executive functions and the evolution of modern hunting and gathering. Paper presented at the Ninth International Conference on Hunting and Gathering Societies, Edinburgh.